慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	故田中教授
Sub Title	
Author	山崎, 又次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.9 (1923. 11) ,p.1598(124)- 1605(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231113-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

して稀有ならざる事實の偶發を見たるものである。且つ夫れ其内容に關しても Turner は云ふ「リカアドオ自身は收穫遞減の法則に關しては、ウェストの著書に現前せる以上の優れたる叙述を與へてはゐない。乍併該法則を以て地代・利潤・勞銀の諸問題と連結し、而して之を分配論の一般體系に織込む事はリカアドオに殘されたる使命であつた」と（Turner: The Ricardian Rent Theory, p. 14）。それ故に吾人は假令ウェストの言説中に多大の獨創的卓見と透徹せる思索とを認めざる可からずと雖、然も之を以てリカアドオの功績を損傷するの具となすは絶大なる謬論なりと斷ずるを憚からざるのである。次に其所論の本質に於てリカアドオを去る事甚だ遙遠なるに拘らず、嘗て其卓越せる先蹤を以て擬せられ且つ自らも亦た是れに任じたるの故に、一聲を拂ふの要有るは Robert Torrens である（未完）。

故田中教授

山崎又次郎

法學博士、三田中萃一郎教授の亡くなられたこと程、突然なるはなかつた。八月十四日の新聞を見た慶應義塾同窓は誰しもその事の意外に驚いたであらう。そして半信半疑で、早々、教授の宅に驅けつけたものもあつたであらう。現に私もその中の一人であつた。教授は鎌田前塾長の所謂「三田山慶應寺」の燈明の一つであつた。それが今、突然消えてしまつたのである。

田中教授は實に三田史學の重鎮であつた。由來、歴史家の間に於ては、殊に獨逸に於てさうであるが、歴史的發達を以て、全く個人の勢力に歸する所のランケの一派、所謂「ユングランケアナー」と、全く社會の團體的勢力に歸する所のラムプレヒトの一派とがあつて、兩派互に議論を戰はして居る。それで、教授をして言はしめると、「一方は極端なる個人主義の見地に立つて、「ヴァレンシュタイン史」とか「ビスマーク史」とか題して個人の傳記を以て歴史の全部であるとする一派であつて、他方は極端なる社會主義の思潮に左右せられて、「英國民小史」とか「日本國民史論」とか題して歴史上に於ける個人の勢力を輕視する一派である」。教授は此等の兩派の中間を執つて居られたやうであるが、しかも個人の偉力を寧ろ重要視して居られたではなからうか。何時か、教授はあの古代史の大家ベトルマンの言葉を引いて、「民衆の漸〻覺醒し來れる現代に於て、偉人の魅力益々その威を逞うすと云ふは、一見悖理の如くなるもその事實なるを如何せん」と言はれたことがある。丁度、今から十數年前のことである。私共がまだ大學の初年級であつた當時、教授は課外講義として、盛にラムプレヒトを研究し、ヘーゲルの歴史哲學を講義せられて居つた。教授はその時分から歴史哲學の方へ切り込んで行かれたのではなからうか。教授はまた非常に政治に趣味をもつて居られた。歐米最近の政治史の如きは教授の最も得意とせられた所である。實際政治の問題に就いても亦、時々あの侃々諤々の議論を新聞雜誌に發表せられて居つた。殊に大正の政變當時、憲政擁護、閥族打破の運動が盛に行はれた時分に「歐米の政黨政治」と云ふ小冊子を公にせられて、大に國民の政治的見識の向上に盡された。また最近、普選問題が盛に論議せられるに至つて、「現在の如く一般の人心が共産主義や無政府主義のバチルスに犯されて放縱

不羈な擧動をも憚らぬやうになつて居る際にその要求に應じて選擧法を改むることは決して國家の重を以て任じて居るものの執る可き途では無い」と論斷せられて、頑强に普選運動に反對し、そして普選尙早論を唱へられた。之が爲に、教授は一部の人達に誤解せられたやうであるが、それは勿論、教授に於ても亦、一般に歷史家に於て見るがやうに、保守的傾向があつたことは事實である。けれども、其等の人達が考へて居るやうな、そんな頑冥固陋なる保守主義者では決してなかつた。と云つて所謂、自由主義者でもなければ、また所謂、急進主義者でも勿論なかつた。兎に角、教授がかうした政治的趣味を非常にもつて居られたと云ふことは、それは教授の嚴君の血を受けて居られたからではなからうか。

教授は田中鳥雄氏の長男であつて、明治六年

靜岡縣田方郡函南村に生れた。嚴君は鄕里での有力者であつた。また衆議院議員にも爲られたことがある。何でも、非常に氣丈夫なる方であつて、その點に於ては教授以上であつたと云ふことである。田中教授こそ生粹の「ケイオ・マン」であつた。そして愛塾者の一人であつた。母校と云ふものが常に教授の念頭から去らなかつた。教授は塾の幼稚舍を振り出しに、大學部の文科へ進んで行かれた。既に、その時分から、教授は歷史、殊に東洋史の研究に一番趣味をもつて居られた。そしてあの世界史學者として有名なる獨逸人リース博士に私淑して居られたやうである。何日であつたか、最近に私が教授を訪問した時、教授は私に、「今、獨逸では馬克相場が大變下落して居つて、皆が非常に生活に困つて居るやうです。リースさんもその中の一人で、先生の大著述「世界歷史」も始ど賣れないと云ひますから、僕もリースさんのことだから、一部買ひ入れました」と言つて居られた。私はその時、教授の恩師に對する情誼が實に厚いことを今更ながら感じた。それから、明治二十五年、教授は塾を卒業せられて、或事情の爲に、數年間、鄕里に歸られて居つた。そして二十九年、さつき子夫人と結婚せられた。教授は鄕里に在つても、常に史才の蘊蓄に餘念なかつた。その果實があの「東邦近世史」である。これは、教授が明治二十七八年の、我國の發達の里標として重大なる意義をもつた所の日淸戰爭に依つて刺戟せられて出來たのであると自ら序文に書かれてゐるが、教授の恩師たるリース教授の感化も亦、可なり大なるものがあつたと思ふ。と云ふのは、この「東邦近世史」は單なる近世東洋史ではない。それは世界史眼から觀た近世東洋史であるからである。教授も亦、その序文に於て、「ヴスコ、ダ、マガ印度航路發見以來羅馬―チユートン民族東漸の事蹟即ち世界史の東洋に於ける開展の顚末を知るは最も今日の時勢に於て必要なるものあらむ。撰者の目的は即ち其大を本邦一般人士に紹介せんとするにあり」と言はれて居る。この著述は明治三十三年に初めて出版せられ、三十六年に訂正二版を重ね、上、下とも二卷である。兎に角、教授は之に依つて、歷史家としての地位を築き上げ、そして歷史、殊に東洋史の權威として一般に認められるに至つたのである。

明治三十三年、この「東邦近世史」を土産に、再び上京せられて母校に教鞭を執ることゝ爲つた。こゝに教授の大學教授としての生活が始まつたのである。三十七年から向ふ數年間、教授は塾留學生として英獨兩國に派遣せられた、そして倫敦大學やライプチッヒ大學に於て、只管、

史學や政治學を專攻せられたやうである。歸朝後は、塾の政治科と文學部史學科とに教鞭を執られ、傍、大學部豫科主任として實際に義塾行政の衝に當られた功勞者の一人である。教授は商科大學に於ても亦、講師として歴史哲學を講義して居られた。大正八年、政治史に依つて法學博士に推薦せられた。教授の大學教授としての生活は一の畑の廣いだけ、それだけ繁多なる生活であつた。けれども、その繁多なる生活の裡にでも　教授は絶えず著述に、飜譯に、その他、新聞雜誌上に於て自分の意見を發表し、また外國の新知識をも紹介せられて居つた。今、その主なるものを擧げると、前に述べた「東邦近世史」の外に、明治四十二年にドーソンの L'Histoire des Mongols（「蒙古史」）を飜譯せられた。これは第一卷のみ世に出て、惜しいことに、以下は原稿のまゝ教授の手下に殘つて居つたと云ふことである。兎に角、私共が東洋、殊に支那に關する著書を飜譯する場合に、必ず經驗する困難は、それは一音の下に漢字が幾個もあることである。例へば、wang と一口に云つても、「王」やら「汪」やら解らない。さうした困難あるにも拘らず、教授が之を飜譯せられたと云ふことは、教授の如き該博なる知識の所有者でなければ到底出來ない事業である。第一、固有名詞だけでゞも頓挫してしまふ。それから、大正二年に「歐米の政黨政治」、三年に「世界大戰の中心人物」、六年にヘットナーの Englands Weltherrschaft und ihre Krisis の飜譯「大英國覇業難」、九年に「普選運動と病的思想」、そして十年にゼロックの抄譯「民主主義批判」を出版せられた。その他、「三田評論」、「三田學會雜誌」、「史學」、「法學研究」、「外交時報」、「實業」、それからまた日本讀書協會へも盛に寄稿して居られた。

私共が田中教授に對して、最も氣持よく感ずるものは、それは教授の學者らしい、眞摯なる態度であつた。教授は、何時、訪問しても、研究して居られた。そして來客に接することを、唯一の慰安とせられて居つたやうである。實際、教授が筆を執られると全く食事をも忘れてしまつたと云ふことを、私は夫人から直接に聞いた。だから、その脱稿の早かつたと云つたらなかつた。しかも、教授はそれを約束の期限よりも、必ず二三日前に書き上げて居られた程、それ程責任の觀念が強かつた。そして、教授はかうして研究した結果を常に力强く世間に發表して居られた。教授は一面に於て深遠なる眞理の研究に餘念がなかつたが、他面に於て堂々たる經國策を高唱し得る勇氣をも亦もつて居られた。丁度獨逸のニーブールとかモムセンとか、ドロイセンとかホイゼルとか、またジーベルやラムプレヒトとか云つた風の方ではなかつたであらうか。國家の急に際しては、「講壇愛國主義」を高唱し、「大學軍隊」をも組織しかねない方ではなかつたであらうか。兎に角、教授は嚴君に似て、どこかに氣丈夫なる所があつた。頑固なる所があつた。何時であつたか、教授が支那旅行をせられた當時、鄭州の停車場で瀛車を待合せて居つた時、折惡しく驟雨に會つた。それにもめげず、教授が瀛車の來るまで二時間餘も、しかも露天のホームに立つて居られたことには一番驚かされたと、同行の私の友人が話して居つた。何事によらず、教授は自分の勢力の最後の一滴までをも絞り出すと云ふ底の人であつた、教授は實際ニーチュエのやうに、勢力の讃美者であつた。それで、教授の博覽强記と云つたら、實に文字通りの博覽强記であつた。私共が教授を訪問した場合にでも、教授はよく、誰々が何年

何月何日にどうしたとか、あの事件が何年何月何日に起つたとか言つて居れた。私共はよくまあ、あれで、教授自身としての思想の統一が出來るものであると不思議に思つた程である。教授はまた公私の區別を嚴格に立てられて居つたやうであつた。丁度、私が時事新報を退いて外務省へ行つた當時、教授の宅を訪問したことがある。その時、教授は何を思つたか、私にローズバリーの「小ピット傳」を與へられた。私はそれ以來、この「小ピット傳」を座右に置いて、暇さへあれば之を讀んで居つた。その中に、かう云ふことがある。ピットと云ふ人は非常に公私の區別を立てた。そして、議會に出ても、議會の尊嚴を思つて餘に固く爲つた。それが爲に、味方と爲るべきものも、却つて政敵と爲つたと書いてある。教授はこの箇所にアンダー・ラインを引かれて居る。教授が何故にアンダー・ラインを引かれたかと云ふことに就いては、徒に忖度することが出來ないが、兎に角教授は公私の區別を非常に立てられて居つたやうである。義塾に關する問題に關しては、少しも感情を交へないで、公平に判斷を下された。それが爲に、却つて問題を惹き起したことがあつたやうである。公平こそ教授の、何よりの强みである。だから、教授に就いて眞に人間味を味ふことの出來たのは、それは家庭に於てゞあつた。私的關係に於てゞあつた。教授はあれで中々、色々なことに趣味をもつて居られたやうである。殊に、支那の古錢に通曉して居られて、よく蒐集して居られた。書道などにも趣味をもつて居られた。

新潟縣の瀨波温泉は、兩三年前から教授が好んで行かれた所である。本年も丁度、國民圖書株式會社から委囑せられて居つた所の、泰西名著歷史叢書の一部たる、ヘルデルの「歷史哲學」の前半を譯了せられて、早速、家族と共にあの地へ行かれた。そして、その夜は何時になく高鼾をかいて眠られた程、それ程、疲れ切つて居られたさうであつたが、翌朝、即ち八月十三日の朝、早々、あの夏でも、つめたい日本海の海水を、しかも本年に限つて、浴せられた。それかあらぬか、教授は腦溢血を起されて、五十一歲を最後に頓死せられた。あの常に弛められたことのない、張り弓の弦は突然、高鳴りして切れてしまつたのである。しかも、まだ爲すべき多くの仕事を後に殘して——

（附記）故田中教授は久しく本誌の經營に從事して直接多大なる努力を行はれたるのみならず、其の研究の結果にして本誌上に於て發表せられたるものが甚だ少くない。本誌は今、教授の訃音に接して哀悼の意を表するが爲め茲に教授と最も密切なる關係を有したる山崎又次郎氏に囑して此の故人追憶の一篇を掲ぐることゝした。

（編輯者）

新刊紹介

Jahrbuch für Wirtschaft, Politik und Arbeiterbewegung 1922/23 Verlag der kommunistischen Internationale Auslieferungsstelle für Deutschland; Carl Haym Nachf. Louis Cahnbley, Hamburg 8.

歐米諸國に於ける社會運動、勞働運動の現勢に通じてゐたいと思ふ者が常に感ずる不便の一は、一目して諸國に於ける形勢の大體を窺はしめるやうな參考書の缺けてゐることである。Labour Year Book 1916 は便利であつたが、其第二卷は初卷とは比較すべからざる不滿足のものとなつた許りでなく、既に第一卷も英吉利以外の國に關しては殆ど何等の報導を與へてゐなかつた。其後 The American Labour Year Book 1917-18 Edited by Alexander Trachtenberg. The